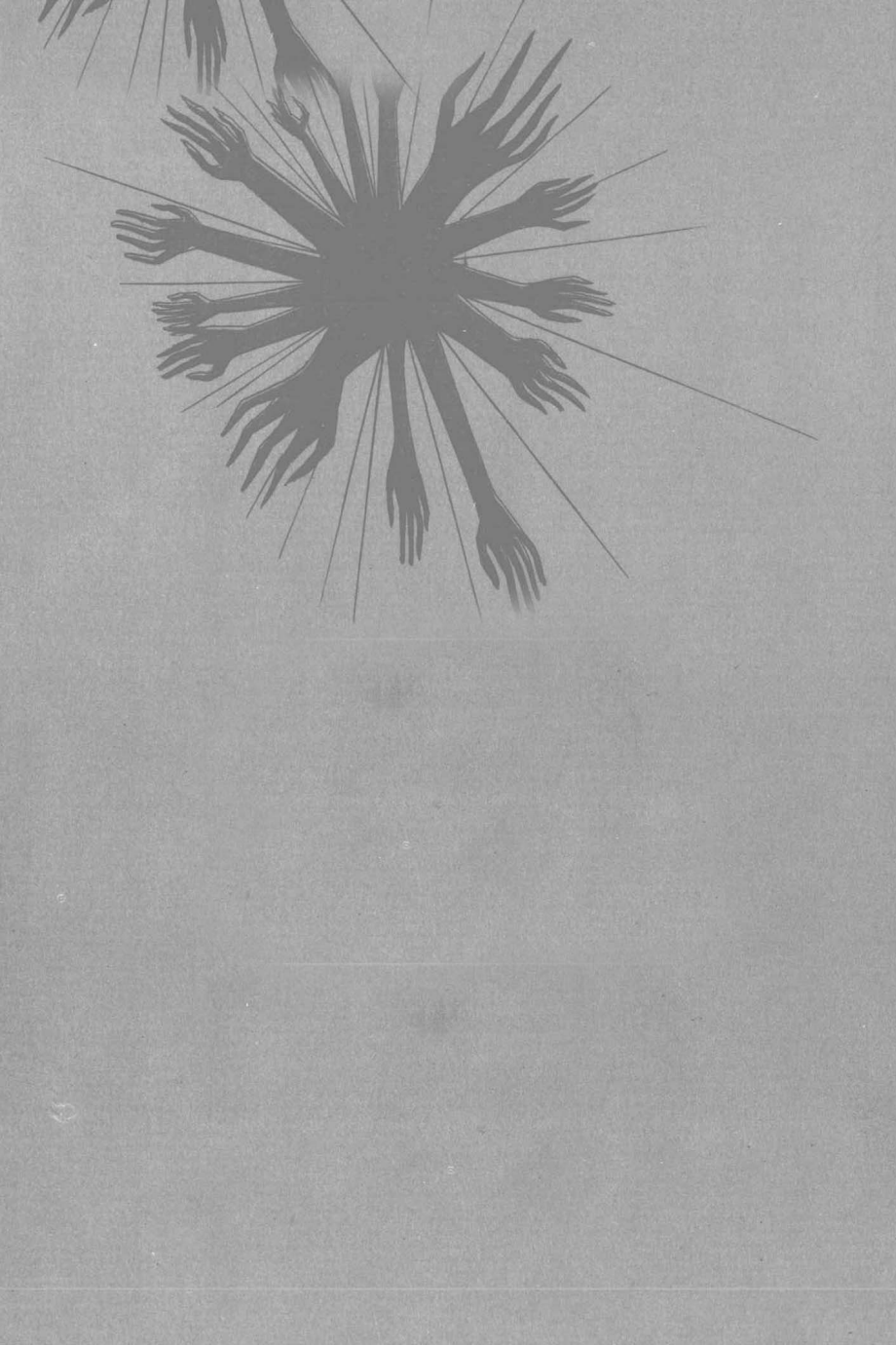




青　い　火　花

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十七年十月五日第二刷発行

定価三二〇円

著　　者　　黒　　岩　　重　　吾

発　行　者　　石　渡　磨　須　子

整　版　者　　内　田　柳　次　郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地
発　行　所　　東　　方　　社

振替東京五七七七四番
電話大塚(MI)一七八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

青
い
火
花

黒
岩
重
吾

目次

青 い 火 花	青 い 枯 葉	黒 い 鳥	生 き た 造 花	病 ^{わづ} 葉 ^ば の 踊 り
------------------	------------------	-------------	-----------------------	--

5	61	149	193	219
---	----	-----	-----	-----

裝
幀

真

銅

博

青
い
火
花

しぐれが止んだと思つたら、夜の冷え冷えした風が吹き始めた。夜九時、大阪ミナミの歓楽街は、何時もなら一夜の憩を求める人達で賑^{にぎわ}つてゐるのだが、今宵は寒さと雨のせいで人影は少く、ネオンだけが、濡れた闇の舗道に、うつろな色彩を滲ませていた。

道頓堀に掛つた相合橋の袂^{たもと}で、客寄せにソロバンを鳴らす手相見の表情も、その音も、今夜は力がなく、昔著名な俳優であつた、この男の肩をすくめる身振りだけが、大げさな影絵のように動いてゐた。

手相見の向いには、ホテルのプラカードを持つた年老いたサンドイッチマンが、まるで石地蔵のように黙然と立つてゐる。多分さつきの雨に濡れた筈なのに、この老人は、向いの手相見とは反対に、ごう然と肩を張つて立つてゐた。

点々とバーの暗い灯が竝んでかすんでゐる北の笠屋町の方から、長身の男がゆつくり歩いて来て、宗右衛門町の煙草屋で富士を買ひ、相合橋にやつて来た。英国ものらしくすんだ鼠色のダブルに、細めのズボンが、切れ長な眼の、色の蒼白い男にびつたりであるが、その足取りは、真直ぐであるにも拘らず、目的を持たない人間のように、無気力であつた。

手相見は、ソロバンを鳴らしかけたが、その男が野刈だと知ると、肩をすくめて挨拶した。

「傘も持たんと、濡れはつたんと違いますか、野刈さん」

大阪一、いや日本一の大キャバレィ、ラブバードのマネージャー野刈一也は、一寸冷たい眼で手相を見見たが、何か思い出したように傍に行つて手を出した。

「へえ、見はるんですか、野刈さん……」

手相見は、一寸手を押しいただく真似をし、懐中電灯を、野刈の掌にむけた。

音楽家のように指の長い掌てのひらであつた。感情線と知能線が一本になつて掌を横断しているのは、ますかけ、というのであろうか。細い短い線が無数にあり、親指の付根の肉は、指とは反対に荒々しく盛り上つていた。中指と人差指の付根には、深い切り傷がある。

「俺の性格だとか、長い先の事は良いんだ、ここ一カ月ぐらいの事が知りたい」

「さあ、一カ月というと……」

「分らないか」

野刈が手を引こうとすると、手相見は慌てて、掌を握りながら、

「手相なら無理でつけど、人相なら……」

「人相、面白いな」

手相見は天眼鏡で、暫く野刈の顔を眺めていたが、

「あんまり良い事ありまへんな、誰れか、そうでんな、野刈さんの親しい人と別れはりまんな、なん

かそんな気配ありまへんか？」

野刈は首を振つた。現在、野刈には、運命に出る程親しい人間はいなかつた。彼はポケットから二百円出すと、「そやけど、当るも八卦当らぬも八卦ですよつて」辯解じみた声を浴びながら、再び真直ぐ歩き出した。

キャバレー、ラブバードは、道頓堀を少し南に下つた所に巨大な夜の花を咲かせていた。屋上のネオンは、赤と黄と銀で、鳳凰^{ほうおう}を形どり、風見鳥のように絶えずぐるぐる廻つてゐる。

建坪一千坪、社交員二千人を呼称^{こしやう}し、眼もはるかなドームの天井からは、三台の空中ステージが下り、細い鉄棒によつて釣り上げられた南北のゴンドラリフトは、天井から十七米下のフロア迄上下するようになっていた。これに乗つてショウに出演するダンサー達がライトを浴び、フロアと天井の間を上下するのだ。

ラブバードには、二十名の、専属ダンシングチームが居た。

三十五才、独身の野刈一也は、そのラブバードの支配人であつた。だが支配人という事は、また経営者ではないという事を意味する。事実野刈は、ラブバードの経営者中国人王燕石の一使用人に過ぎなかつたのである。

野刈は、裏口の従業員の専用門から、ホールに入つていつた。ホールは七分の入りであつた。バンドはスイングでハレームノクタンを演奏している。

野刈はすすり泣くようなアルトサックスの音を聞きながら、ポーチの方に歩いて行つた。ポーチのレジの向いには棕櫚しやうりの樹があり、その下の蔭の場所には、イブやカクテルドレスの女達なが一行に並び、客が入つて来るのを待つていた。

その女達のうち幾人かは、野刈を嫌悪の視線で眺めている筈だつた。冷たい男、ドンファン、その視線はそう言つてゐるに違いなかつた。

レジの右横には曲りくねつた階段があつた。野刈が上ろうとすると、玄関口に立つていた、黒背広に蝶ネクタイの主任が腰をかがめて言つた。

「マナージャー、今夜、ショウの五月陽子が急病で欠けましたが、代役には江藤さんが、楓京子を使つたようです」

「良いだろう」野刈は無感動に答えた。

五月陽子は、一年程前迄、ダンシングチームで、主役級であつた。だが最近二十九才の陽子の肉体のおとろえは激しかつた。

野刈は陽子とは、三度程関係した事がある。野刈は腕時計を見た。九時である。あと二十分すれば今宵のダンシングショウ、『春の夢』が始まる時刻であつた。

野刈は三階の西の隅の厚いビロードのカーテンに隠されたドアを押し、四階に通ずる暗いコンクリートの階段を上つて行つた。電灯のない真暗な階段であつた。客席には驚く程高価な照明がまたたい

ているが、従業員の通路には、終戦直後の焼跡のビルに漂^{ただよ}つた、あの荒涼とした闇の匂いしかなかった。

四階は、予備のボックスとか椅子とか、当分要らないショウの大道具や小道具が、無数に雑然と置かれていた。生コンクリートの荒壁にはめられた汚れたガラス窓の上に裸電球がつき、畳が四つ、セメントの床に敷かれている。天井には電球のないソケットが五つ六つぶら下っていた。

畳の上には、カーディガンを寒そうに背中にはおつた、セミヌードの四人の女が、小さい電熱にあたつて、ショウの始まるのを待つていた。珍らしく四人の女は黙りこくつていた。三人迄煙草を吸っている。

煙草を吸つていない女は、頭に長い羽毛のついた王冠を被つていた。女の名は、青柳ゆりえ二十一才、今宵のショウの主役であつた。女達が坐つている直ぐ傍には、南側のゴンドラリフトに乗る入口がある。女達は野刈を見ると、一斉に会^{あしやく}集した。

皆、野刈に氣に入られようと必死であつた。若し良い役につき認められれば、何時映画会社から、また一流劇場から口がかかつて来るか、分らなかつた。事実ラブバードダンシングチームはそれだけの評価を持つていたのである。勿論演出者は他に居たが、女の価値を決める決定権は野刈にあつた。何故なら、ラブバードダンシングチームは、所詮^{しよせん}女を抱いた酔客が見て喜ぶキャバレーのダンシングチームでしかなかったからだ。

青柳ゆりえは、T映画会社から勧誘を受けていた。T社は梅田に本格的ヌード劇場を持つ一流映画会社であつた。ゆりえの前途は洋々としてた。そのような勧誘をダンサーが受けた場合、その事が野刈の耳に入るのは、大抵止めてからか、他の踊り子達からであつたが、ゆりえの場合は違つていた。ゆりえは、直ぐその事を野刈に告げたのである。丁度一週間前であつた。

野刈はゆりえが入つた時から認めていた。彫の深い顔に大きなすんだ瞳、のびのびとした手足、小麦色の肌は驚く程きめがこまかく一見あいの子を思ふ霧朧氣があつた。若し映画界が、白豚のようなヌード女優にあいた時、次に求めるのは、このようなタイプの女でしかない筈である。だが、野刈がゆりえを認めたのは、良く考えれば、そのようなもの以外の、要素もあつたようだ。

ヌードダンサーの里あけみが、媚のある眼で野刈を見た。

「マネージャー、あたらない？」

「小つちやな電熱だな」

「電気ストーブ欲しいわね」

掠れた声で吹雪絹代が言つた。絹代はフィリップスの歌手と結婚している映画女優とそっくりの顔をしていた。それは顔が似ているというより、似せるように化粧している為であつた。野刈は誘われるままに、絹代とも一度関係した事がある。

「もう一週間もすれば春が来るよ」

「ほんとに早く来て欲しいわ」

ほんとに待ち望むような声で言つたのは、五月陽子の代役になつた楓京子だつた。

ゆりえは、何か言いたそうな表情になつたが、野刈がゴンドラリフト室に入つていつたので、口を開かなかつた。

ラブバードのゴンドラリフトは、踊り子達が立つ所は、ライトを浴びた場合輝くように、砲金でつくられていた。踊り子達が降りる際は、ゴンドラリフトに乗つてから、ゴンドラリフトを釣りさげている三本の細い鉄棒に攪り、壁際のスイッチを捻^{ひね}れば良かつた。その鉄棒は上部が籠のように組み合され、太い鉄のワイヤーで釣りさげられていた。薄暗い狭い部屋の中で、にぶい光りを放っている砲金のゴンドラリフトの丸い踏み板と、床のコンクリートの隙間から、十七米下の、ホールのフロアが見えていた。女給と抱きあつた数組が踊っているのが、まるでおとぎの国で指人形が踊っているように小さかつた。

落ちたら、ひとたまりもないな、と、野刈はふと思つた。

事実女達は、このゴンドラリフトに乗る事を酷く怖がつていた。が、反対に、それに乗る事を非常に望んでもいた。何故なら、ラブバードダンシングチーム二十名中、主役級だけが、ライトと満場の視線を浴びながら、三階の天井から降りる権利を持っていたのである。

戻ろうとして野刈の眼に、ゴンドラリフト室の板囲いの木目が取れ、隣りの電気室の明りが洩れて

いるのが見えた。

そう言えば人が動く物音がする。野刈はゴンドラリフト室を出ると裏手に廻り、電気室の戸を開けた。

ラブバードの電気掛け田所が、足元にコードを無数に散らし、スイッチを直していた。田所は野刈よりも、もつと青い顔をしていた。二十五六であろう、黒いよれよれのズボンに茶のジャンパーを着ている。田所は去年迄電気技術者第四種の試験を受けると言つて頑張つていた。だが最近の仕事にも酒を飲み、何処か生活に荒れた所が見えた。

おそらく誰か女がついたに違いない。このような世界に入り、真面目にやつて行こうと思う青年にとつて、最も危険なのは女であつた。女以外の何者でもなかつた。

「どうも漏電が気になりまして、天井裏を調べた所です。一昨日のアルサロの火事も、漏電らしいですから」

野刈が何も言わないのに、田所は説明するように言つた。そう言えば電気室の板囲いに梯子はしごがかかつていた。

「本当だ、火事と言えば大抵漏電だからな」

野刈が、踊り子達の前に姿を現わすと、青柳ゆりえが、立つて傍に寄つて来た。黒曜石こくようせきのような眼だな、と野刈は思つた。

「どうだ、行く決心をした？」

「今夜、ラスト後、お話したい事があるんですけど……」

ゆりえは、野刈を真直ぐ見て言つた。喉の所に小さなほくろがある。この寒さで裸で居れば普通なら鳥肌がたつのに、一見した所ゆりえの肌はすべすべしたままだった。

「スワンで待つている」

野刈はバーの名を言つた。里あけみが伸びをしながら立上つた。「さあ始まり始まり」そして、野刈とゆりえを横眼で眺めながら、北側のゴンドラリフト室に向つて歩き出した。南側のゴンドラリフトは、フロア迄下りるが、北側は五米下の、空中ステージで止るようになっていた。

吹雪絹代は坐つたままで、二本めの煙草に火をつけた。そして楓京子に、

「ゆりえ、マネージャーに参つてるのは本当ね」

「マネージャーも、一寸気があるんじゃない？」

「ゆりえがT映画に行つたら、京子また、先生とよりを戻す積り？」

「ふん、あんたこそ、またマネージャーに熱をあげるんじゃない？」

だが絹代はそれには答えず、煙草の輪を、ふーと、京子に吐きつけた。

野刈は電気室から出て来た田所と一緒に、また、あの暗い階段を下りて行つた。

「四階は陰気な場所ですね……」